

# 体育教員養成における資質能力の向上に関する研究

## －現象学的視点から見つめなおす－

近藤 誉 （ 静岡大学 ）

### 1. 目的と方法

本研究では、体育教員養成における体育教員としての資質能力の向上への取り組みを目的とする。

その方法として現象学的運動学の視点から借問分析を行いながら目的を明らかにしていく。

### 2. 事例について

#### 1) 内容

事例分析では指導力の向上を目指す学生が実技能力の向上を目指す学生を指導する形をとる。また、指導力の向上を目指す筆者も積極的に介入し促発作用に対して反省の目を向ける機会を促した。

#### 2) 対象

学生へのアンケート結果から抽出した2名（指導力の向上を目指すA、実技技能の向上を目指すB）

#### 3) 時期

令和元年11月21、22、28、29日

#### 4) 課題運動

バレーボールのアンダーハンドパス

### 3. 事例の分析

#### 1) A・Bについて

Aはアンダーハンドパスの実技能力をほぼ完璧に身に付けていた。

Bは足の運び方を気にしすぎてボールの落下点に素早く入れないという開始局面の課題がある。

#### 2) 分析の視点

AはBに対し「屈伸運動のように膝を使って」といった外面的な指示をするだけでBの内面的な欠点に気づいていなかったため、ここではAによるBへの指導事例を事例分析の対象として取り上げる。

#### 3) 分析

1日目のAに対する動感借問からAの動感運動は匿名性を帯びたまま習慣化した身体知であり、自分の身体の位置や向き、どの方向にどのように動いているのか把握できていないことから定位感能力が空虚であることが分かった。そのため、Bの動感形態

を読み解くうえで自身の身体知を抛り所にできず、誰にでも当てはまるような科学的メカニズムや客観的アドバイスの呈示に留まっていた。しかし、創発身体知分析能力を働かせ実践に取り組んだため、4日目の動感借問では具体的な動感を言い表せるようになった。つまり、匿名性を帯びていた身体知が創発身体知として充実したと言える。

また、AはBを指導する中でBの落下点までの足運びに違和感を覚えた。そこでA自身の足運びを分析し、野球のゴロ捕球の身体知と類似していることに気づいた。そのため、Bに対し「ゴロ捕球のように」とアドバイスを処方し、このアドバイスがBの動感意識に共鳴し課題は解決した。その結果、その他の課題に対して解決のための道しるべが明確となり、Bに対し具体的なアドバイスが増えた。

ここでは互いに野球経験者というところから動感出会いが起り、Aの創発身体知を抛り所とした動感他者観察と動感交信を駆使し代行が行われたと考える。事例のように指導者は学習者の存在があることで創発身体知分析の契機を得ることができ、その分析した創発身体知を抛り所として促発身体知分析を行い、固有の動感意識に入り込んだ間主観的指導ができるようになる。

### 4. 結論

現象学的運動学からの動感分析は有効であり、指導力の向上に役立つといえる。そのため、体育教員養成の講義において指導者として必要な促発身体知分析能力の獲得を創発身体知分析と共に意識して取り組むことによって、体育教員養成における教員としての資質能力の向上が期待できる。

### 文献

- 金子明友（2005）身体知の形成 上, 下, 明和出版
- 中村 剛（2008）観察力を支える身体知の例証分析, 運動伝承研究会, 8号